

幼稚園におけるからだづくりを考えるための実態把握と学習内容の設定 —ニーズのある子どもの指導を考慮して—

専攻 特別支援教育学

コース 特別支援教育コーディネーター

学籍番号 M09108D

氏名 上山 和代

I 問題と目的

子どものからだに危ないと指摘されるようになって久しくなる。内容は、体力低下と運動量の低下、怪我の増加と動きの不器用さ、生活習慣病と肥満、アレルギーや体温異常である(中村, 2004)。原因は、子どもがからだを動かす機会の減少である。そして、防衛体力や自律神経系の異常にも影響を与えている。これらの問題は幼児期から始まっている(杉原・森・吉田, 2004; 中村, 2004)。

スポーツテストの結果が示す上昇や減少時期を考察すると、1980年後半以降の低下は『楽しい体育』の考え方の基で行ってきた結果であると推察する(正木, 1991; 久保, 2006)。学校で何を学ぶかが、子どものからだに影響を与える(別所, 2009)。

幼児期は、基本的運動技能の習得時期であり、神経経路が大きく発達する時期である(三木, 2009)。よって、からだを動かす楽しさを知り、様々な動きを身につけることは、その後の体力・運動能力の発達に大きく影響してくると推察できる(藤川・重本・小峰等 2008)。幼児期に獲得しておかなければならない能力を育てる適切な運動遊びを指導するためには、子どもの発育発達の特性を理解することが必要である(三宅, 2009)。その特性に関する発達の課題について知ることは、一人ひとりの発達の姿を見つめることで行える(文部科学省, 2008)。そのためには、発達の特性と発達課題を把握するための視点が必要になる。幼稚園要領には、視点については記載されていない。

そこで本研究では、子どもの気になるからだの特徴に対応する学習内容を設定するために、研究目的を以下の2点に設定した。

【研究1】気になるからだの特徴から見える課題や幼児期の発達段階、発達の基本原則を考慮したからだについての実態把握の項目を検討する。

【研究2】気になるからだの特徴を改善するための幼稚園時代の学習内容を検討する。また、一人ひとりの発達の特性に焦点を当てるために、運動の苦手な園児、集団での学習に不安を抱く園児等、ニーズのある子どもに考慮して指導を行った。

II 方法

1. 研究1：からだに関する幼稚園時期の実態把握試案の作成と実施

(1) 実態把握試案の作成

「子どもの気になるからだの特徴」「幼児期のからだの発達」「発達の基本原則」から実態把握項目の試案を作成する。

(2) 実態把握試案の検証

1) 対象：A町立B幼稚園

対象児：5歳児・男・診断名AD/HD

個別に対応すると落ち着いているが、集団場面での学習になると精神的に不安定になる。

2) 実施期間：X年4月～7月

3) 方法：実態把握試案を幼稚園で実施する。行動観察や園活動全般チェック表も実施する。

3. 研究2：実態把握試案を基にした学習設定 の設定と実施

(1) 学習内容の設定

「子どもの気になるからだの特徴」「幼児期からのからだの発達」「発達の基本的原則」の観点から学習内容を設定する。

(2) 学習内容の検証

1) 実施期間：X年6月～10月

2) 方法：研究1の結果よりB幼稚園の園児の実態を整理し、それに基づいて(1)の学習内容から実態に合った内容を選択し、実施する。

4. 結果

(1) 研究1

1) 実態把握試案の項目と観察ポイントの設定

実態把握の項目と各項目の観察ポイントを以下のように設定した。

①姿勢：背筋がまっすぐかどうか、胸をきちんと開いているか、首を前に突き出していないか、肩の高さが左右同じか、腰の高さが左右同じか。

②姿勢保持(20秒)：直立姿勢を20秒間保持する。

③首の立ち直り反応：四つ這い姿勢で顔を左右に向けても反対側の腕は伸びたままである。

④箸(スプーン)の持ち方：

スプーンは、拇指と示指が向きあって持ち中指で支える。箸は、動く箸を拇指と示指が向きあって持ち、中指で支える。

⑤足の親指の蹴り：そん居姿勢(踵をあげる)で、上体を真っすぐにし、両手を少し開いて歩く。

2) 実態把握試案の検証

B幼稚園で、実態把握試案と共に、行動観察と作成した園活動全般チェック表も実施した。筆者が行った実態把握試案と行動観察の結果が、担任が行ったチェック表とに違いが出た。

(2) 研究2

1) 学習内容

学習内容を考える時の視点「最近の子どもの気になるからだの特徴」が同じであることから、丸山(2007)のリズム運動を行うことにした。

2) 学習内容の検証

研究1の結果から推察されるB幼稚園の実態に合わせて修正し実施した。学習の前後で2クラス共に変化があった項目は「足の親指蹴り」「片足立ち」であった。変化があまり見られなかった項目は「姿勢保持」「箸の持ち方」であった。また、最初から全員が基準達成の「首に立ち直り反応」、学習前に一人も達成しない「足の親指の蹴り」があった。対象児を含めて、学習を進めることが難しい園児がいた。課題が難しい場合は課題を2ステップに分けて行った。対象児は、全園児との学習が困難であったので、個別やクラスでの事前学習を行った。結果、集団学習が行えるようになった。

Ⅲ 考察

1. 実態把握試案

担任が行った実態把握と、筆者が行った実態把握試案に違いが出た。学習が進む中で把握した実態と異なることもでてきた。よって、実態把握は、具体的な項目を設定し、実態を見る視点が具体的にあることが、子どもの理解をより具体化し、適切な学習内容の設定に結び付くと考えられる。

2. 学習内容の設定

項目による変化の違いは、学習内容と実態把握の項目と近い内容かどうかであると考え。このことから学習内容は、実態把握から身につけさせたい力をより細かく具体的な課題を設定し、その上で学習内容を設定することが良いと考える。そうすることで、事前の実態把握で全員が達成できたり、できなかつたりすることもないと考える。

主任指導教員 宇野宏幸

指導教員 石橋由紀子